

土屋
正義
編輯

繪本石山軍記

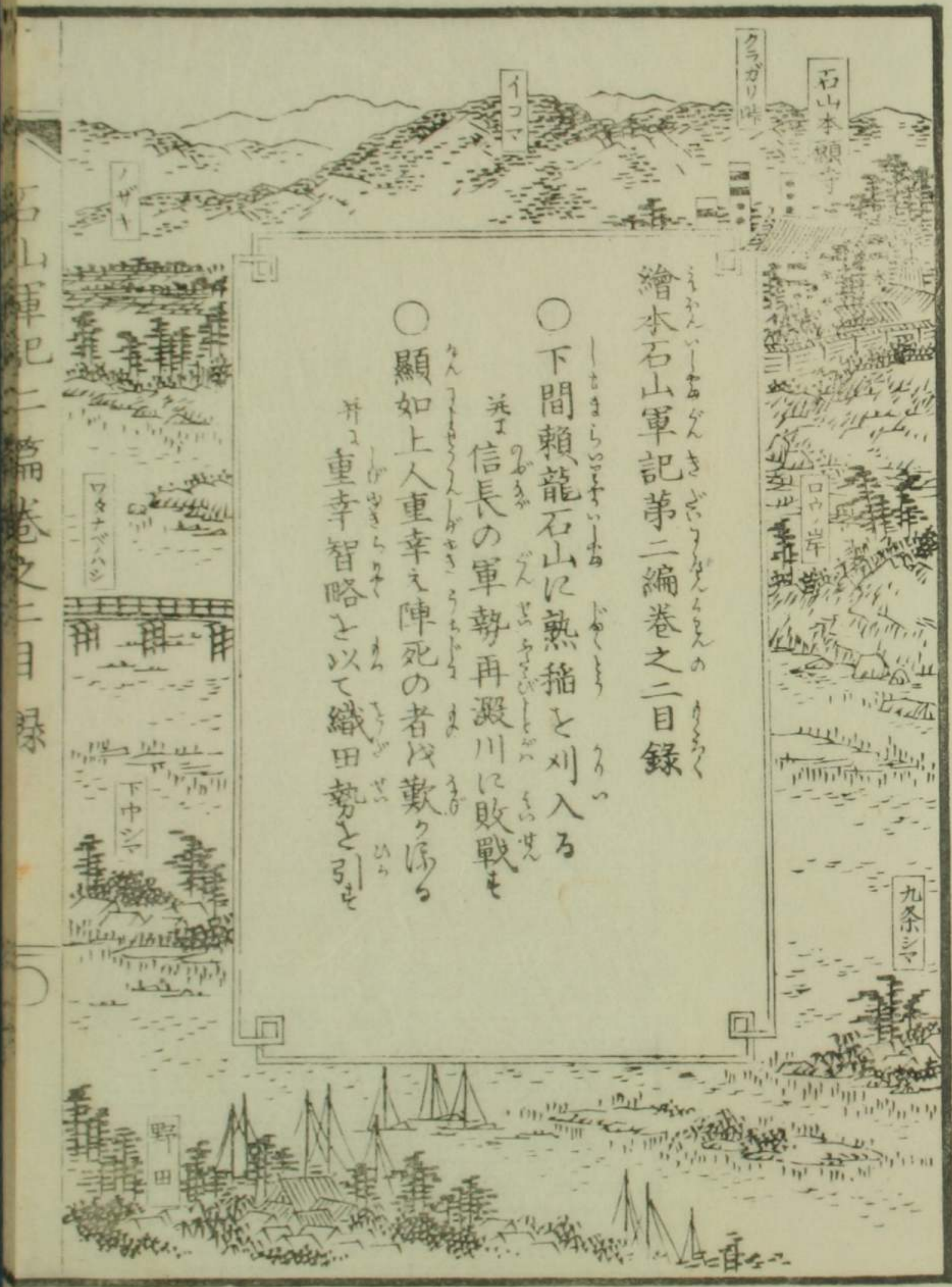
第二編

二

遠屋
2269
12



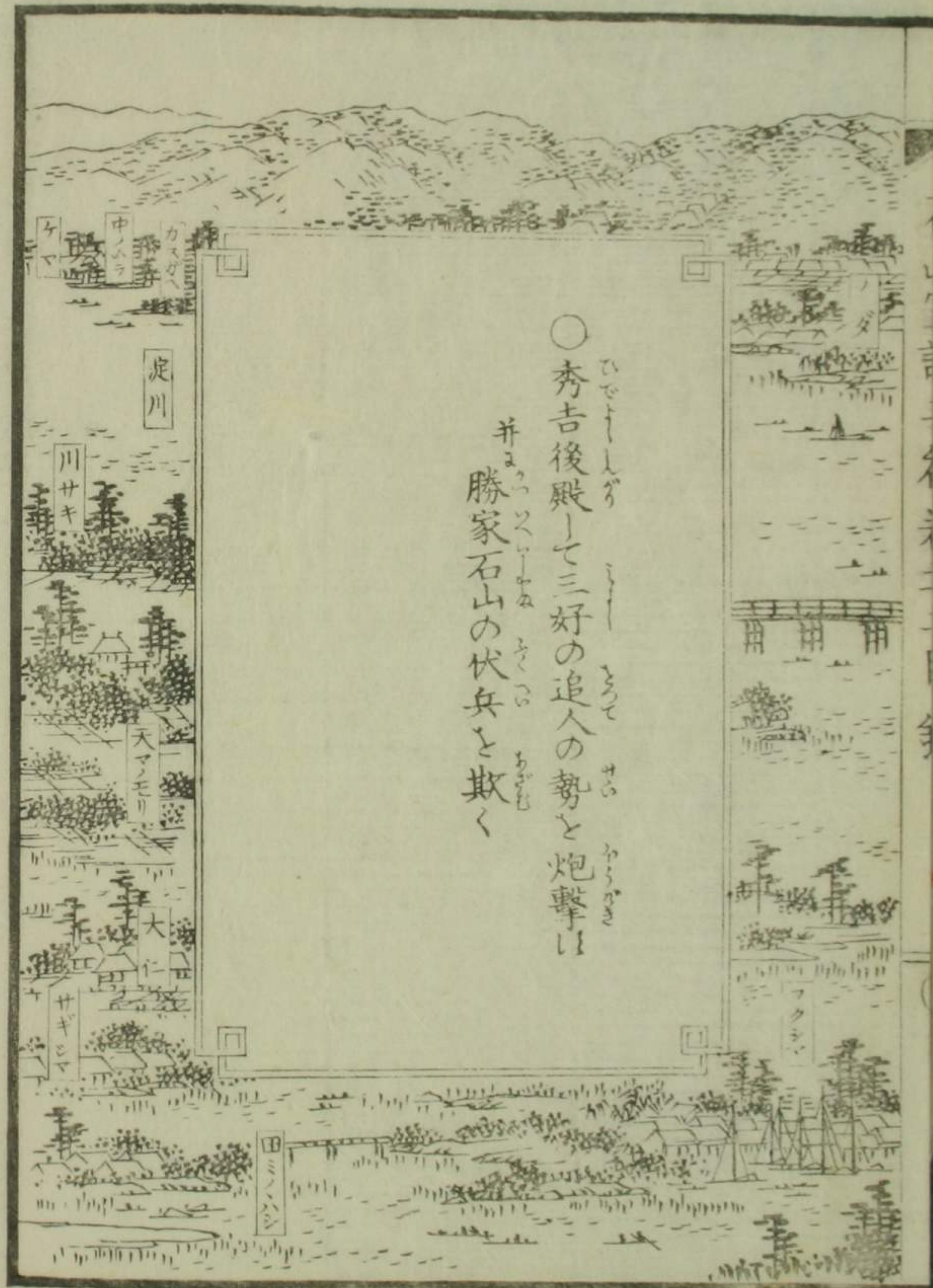
特
 小遠 14
 2269
 12



繪本石山軍記第二編卷之二目錄

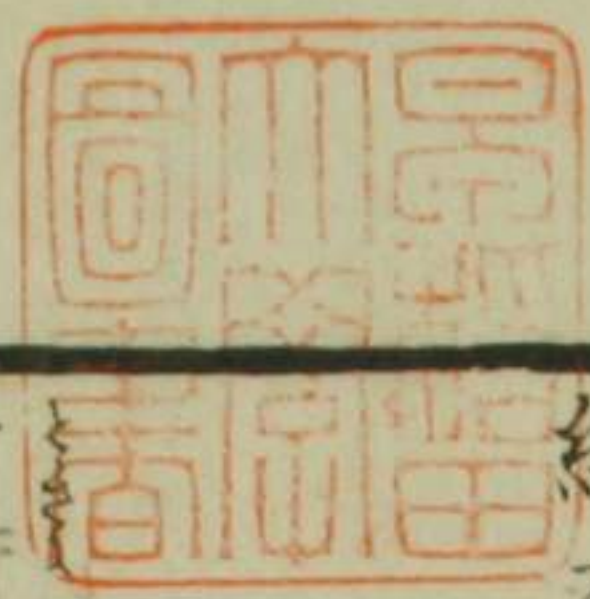
- 下間頼龍石山に熟播と刈入る
- 信長の軍勢再澱川に敗戦も
- 顯如上人重幸え陣死の者以數うはる
- 重幸智略と以て織田執事と引と

石山軍記二編卷之二目錄



○秀吉後殿して三好の追人の勢と炮撃は
 勝家石山の伏兵と欺く

繪本石山軍記二編卷之二



上屋正義 編輯

○下間頼龍石山の熟稻と刈八并二信長の軍勢再淀川に敗戦

千時同月下旬に速びて掘河の田地殊に豊饒一遅稲と熟實と刈
 取る時迎へ程に本願寺の坊官下間按察使法橋頼龍と云る射門徒の
 農民五百人に牛馬百余匹を牽せて河筋茨田郡守口の莊及び佐田の傍
 邊と刈取めんと既に出行の準備頗るれ軍師重幸徳と聽より頼龍を見
 へて粟とれたる熟稻收納の緯所理至極之併今當城内に於て兵糧に不
 足るく存る之足下漫に寺境を放れて織田の軍兵們に把籠られ過失索
 め給ひを諫むれ頼龍打突て受けハ軍師心と勞し給ふ緯勿れ俺

熟稻と惜む処に一年一度の穀物あるれば之と収入すれば數万人と蓄ふ尚
之と敵に刈把るは敵に十分の銳氣と着させ味方疲衰の憂と招く
籠城の際限かき時に於ては金穀の手當と最第一とせ故に城中餘分有
と雖も俺敵の有と爲と惜むと云ふ重幸強て制むるに術なく然らば豫
め余隊とありて出城し給へと稟されつ常樂寺及び八木駿河守河邊
主馬合等と呼て精く計略と稟し合め選兵二千人と分ち與へ頼龍と俱
お打立しむ

儲這下間頼龍と云へ當主頭如上人に奉仕て本願寺隨世の長臣となり
原來武勇衆ふ超過し其譽世に高りけり遠祖の清和天皇の後胤源
三位頼政の曾孫と下間兵庫頭宗重と号し常陸國河内郡下間の

里に居住るを宗重開山親鸞上人に歸依し雜髮して徒弟と成り法
名と蓮位房と更む從是子孫世々相續き御代々御門主に給仕かせ
り蓮位房六代の後孫丹後法橋玄英と云へ八代中祖蓮如上人に仕ふ
這玄英に八人の男子あり嫡子筑前守法橋頼善二男備后守盛頼三
男助縁法師四男越後守頼永五男上總法橋慶秀六男遠江守兼頼
七男周防守頼宗八男駿河守光宗と号し然るに嫡子筑前法橋頼
善が二男丹後法眼頼玄も同く蓮如上人に奉仕を介舎弟上野法橋頼
慶頼慶が二男上野介真頼其子則ち按察使法橋頼龍之又玄英が四
男越後守頼永が子と源十郎頼色と号く其子頼康其子刑部法眼頼
廣も顯如上人に給仕をけり又法橋玄英が末子駿河守光宗が子に

筑後守頼清と云あり其子筑後守述頼其子少進法橋伸之是も
頭如上入に奉仕し頼龍頼廢と三人心一致し方端小大とるく執行すと云
浩て下間按察使法橋頼龍五百余人の農民們と牛馬百余疋と牽連
萍上江堤守口の邊に出て思ふ儘に田を刈せざる這時織田方の附城よ
り僥と視るより打も置れず急ぎ信長の本陣ある中嶋へ注進るはひそ
早雄の若武者之と聽より刈田する門徒の晝奸盜門疾打除へ追散せと
て二千余人許り蒐出つ河越に東堤と望と看れ石山勢五百人余り
敵の來るも恐れざるはや他念あらず稻と刈居る土居森小路の村手に
於り南無阿弥陀佛の名號書する白旗三流川風に翻り亦馬印一指
物かども樹の間藪蔭に端麗しむる六倍の伏兵と構へ田を刈るぞ虚と向

り不覺を把んと暫し猶豫控へ一處に一個の兵士進と出て否是は敵の
計略ありし一旗馬印と抹跡に立置伏勢有氣に味方と惑し介間に
安々稻を刈せん疑念に探る謀策あらん其証據にハア旗馬印一實に
伏兵構へしある何條之と人目に看せんや空地の藪に驚うめて味方
の剛臆試さん方策片時も早く川を渡し昆太門徒們追打うけて附入
に石山を乗取やと勇と立つ勧めを衆人實ると一同して卒去ハ河
を渡さんとして手綱の繰進まんとす時に亦一個の武者抑制めヤレ何方
も先控（給）一是は敵に深き手段と看て候ふ介謂ハ素より富饒の
本願寺僅廿日に足ざる籠城に争う兵糧負り刈るべき正しく是れハ刈
田に假託味方の勢と釣出を底伎倆之漫に逸りて川を渡らハ後悔有

下間頼龍
 津江村の
 熟稻と川
 取り織田
 勢と大ふ
 戦ふ圖



石山軍記二卷之二



石山軍記二卷之二

南無不可思議

べしと諫められば如何様是も所理とて右左の評議に時を遷せ小間
に石山勢十分稻川して牛に牽せ馬に駄せて難らく寺中へ把入に
浩る処へ信長の指揮を受け佐々内藏助成政を始め野村越中守定常
福富平左衛門正清野々村三十郎高經林新三郎并戸才助湯淺甚介
等三千余騎先を争ひ駈來つて斯と看てより左右の論るく澱川へ派
と駒乗入つて我後れと打渡りけり這時村方に看ゆり白旗三流を動
と思ふ開と作つて門徒の軍將常樂寺と先と八木駿河守河邊主
馬介二千余人川端堤に混々と押列ひ千挺計りの鳥銃と構へ織田勢
半流るを見濟一同に哄と撃放ち々々も敢て三百余騎撃倒さ
とて流るふたり是はく甚麼にと漂ふ処と石山勢へ圖と外まかして

鎗先揃へて突て懸る佐々成政野村定常鎗打振つて味方を励し引
か進めや後とと把高が門徒の寄合勢ぞ豈踏入に難くらんや後へ
引そと呼りりく真先に駒と乗出して近寄敵兵二十騎許り川中へ
刺閃斬て落し喚き哮つて挑合に難るく川と押渡り討つ討ま
つ鐵花と散り鎗を削つて戦ひける何時果ぶとも看へざりけり茲に
石山勢の中より一々黒革威一胴丸の鎧と着し蛇頭の甲と猪首に
被き刃の徑り四尺に余も大薙刀と輕々と打振嶋田源太と名乗
りて野村越中守を目懸て一文字に打て懸りけり越中守其日の
打拾ひ朱塗具足に鐵鎖の諸小手懸大刃鎗と叱々と引くも
栗毛の駒に打跨りしが嶋田と看やりて完尔と打笑艶しき野武士

が行状を汝們の望みの如く首奪て弥陀の浄土へ未來の先鋒致させ兵卒來れりやと罵も敢て突出を穂鋒と閃りと拂ひ一往一來手練と場へ火水の勢いで戦ふる素より野村の剛勇の二將嶋田が振込大薙刀と二三度四五度透きと看へが潜り入つ手利くも薙刀をうしと刎落させ繰出を鎗鋒目にも看せど嶋田が眉間と刺貫きて竟に首級とぞ奪とりける諸首と太刀に差貫き從兵に持せて駒を振向味方の後陣へ引んとするに石山方の中より大音にて其処引給ふ織田の軍將野村越中守定常殿と紀伊國雜賀の住人とする志摩与四郎見参稟さん暫々と色と懸つ十文字の鎗右手に振立逸散走り追懸來る越中守屹と看轉りて何れ暫も猶豫なき忽ち鎗と緘と合

して上段下段透間もろく雷光石火と摺放が如く須臾が程を打戦ひしが野村へ聞ゆる勇將もども已に這時命運盡しや志摩が鎗先と受損り胸板ごとく刺徹され何れ以て惣るべきや馬より撞地落る処と与四郎乗係つて首級打落し高く差上大音と上げ織田方の軍將野村越中志摩与四郎討取らるごとと呼らる声に石山勢の勇進んで競ひ懸り縦横無盡に斬て廻れりもの織田勢四度路に崩れ津上江堤と東の方へ人雪顔して敗走する追懸追詰撃立られて殆織田方難儀の折節大将信長の指揮に依て前田又左工門利家八百余騎の選兵と卒し味方の軍と接けんとして揉に揉てぞ馳來りて真十文字に川と渡り勝誇りける石山勢の真中へ面も振を打て懸り日來の勇氣

十倍して捲り立つ斬散せ、新丁の織田方に門徒勢も七烈八摧に切立ちと轉つ倒まつ引て行と適さし遣はると前田の一軍、小他先の佐々福、富湯、淺の三隊の兵卒り轉して石山勢と追討懸れ、愈散兵して討れあがり、這時本願寺よりも軍師の指揮として下間出羽守五百余騎と卒し、援助の爲とて押來り互に新手と入替つ時刻と迂して戦ひあがり、秋の鳥の暮るに近く殊に下旬の闇路深く双方引鐘鳴して軍と治め相引にこそ歸陣ありぬ、這日織田方陣死の者將卒合して六百余人、石山方は陣死の兵卒二百余人に速ぶと聞ゆ、去る九月十八日石山攻の夜織田勢敗走の最中丹羽長秀も惣崩れあつと心る、いづれも人雪顔して天王寺より十八丁東ある舍利寺村まで

立退るる平野の郷の方よりして石山方の軍兵門南無妙法蓮華經の題目書し、信長の太旗と奪ひ取勇んで石山さうして引行と長秀遂に着て大きに驚き、信長尙討把れや、給ひえん然も無くとも大将の御旗と敵に奪つれては耻辱とて逐懸行んとせし時、向ふの堤乃樹陰より六尺余の大兵忽然と顕れ出、石山方の真中へ踊り入、彼大旗持する雜兵と右手に搦んで七八間許り邊の深田へ碇と投込し、旗と奪ひて掻消せ如く介姿とく躲く、いづれも丹羽長秀大きに奇怪敵り味方卒知を何乃処爲とも分とせし、て太不思議ある、緯へしとぞ猶這の靈驗ある、緯共の鷲の森合戦乃條に的然とて氷解まへま

○頭如上人重幸へ陣死の者と歎き、重幸智略を以織田勢を引

然る程に御門主頭如上人の淳上江隄合戦の勝敗と一々聞し召つ歎けせ
 給ひ陣死乃亡骸と取集めさせられ二の丸と外廓の間に埋葬し上人自
 ら讀經念佛唱へ懇ふ回向吊ひ給ひ々々寺中に籠れる軍兵們は是を視
 るより僉哭出してあり有難の御吊ひをか俺們未ど業因竭やとて該陣死
 の群に外れし緯ふ活如來乃御門主様乃回向に預る佛果の明證争り
 成佛做で有べきや噫尊と羨ましくと隨喜乃涙に合掌して異口
 同音に念佛して冀く佛敵信長と俺們が手に討しめ給り宗門永
 續るまゝしめ給り翌乃錆に成果るとも阿弥陀様への御恩報し厭ふ
 心の有へうと倍々金剛乃心緒と固めて籠城限りおき勢者へとりさ
 も剛雄乃織田信長も石山本願寺に持摠と合戦毎に利と失ひし偏

に他力の信心に依ゆ之斯乃如く石山方に於る衆兵乃銳氣盛るれど
 も上人の唯敵味方の死傷と歎れ重幸と召れて仰けら軍師諸葛子
 房が籌策と施し百戦百勝的らすと云緯中一實に貧道感心に堪る
 処之然りと雖も出家沙門の躬人命害傷深く厭ひて造悪第一の禁誡
 とを然らば那謂籠城すと稟さるは是は唯信長の暴逆禦く迄一人
 命屠殺の本意に非を依て願わら信長とて疾く本國へ退ぞりしめ當
 山合戦の止むん緯と社日夜望と欲ふ処ととて泪と落して曰ひ々々事幸
 謹て答へける様へ仰せの如く誰う闘戦と好む亂と歎ふ者候らんや然れ共
 信長一事兩端の欺謀と構三好任伐と名義とて介實に當山と攻潰さ
 んとを此謂に三好の二黨退去する共亦に當般滅亡しと共猶も信長



頭如上人

頭如上人



重幸が智計み
頭如上人浅井
朝倉の両家へ
使者と立

あし図

鈴木重幸

横田主膳

七里三河守

一

軍勢と合併し愈當寺と攻討緯必然は是合戦の止ぶらざる勢之上入強
て信長と退けんと思し召し長く持ち稟すぬれども其箇の計略
候ふ之設越前の朝倉義景へ上人と御縁家の間にて信長とハ代々の
怨敵之亦江州の浅井久政父子も義景に一味合射して今信長と矛盾
に遠く依て上人より使節と立しめ浅井朝倉と打談合兩家の軍勢を
發し上洛せし信長脊の災ひと怖畏て忽ち軍勢を纏め引取ん是手と
他に借て敵を征す臨機應變に行ふ心策之這議如何と伺ひまゝ上
人聞し召て感心在し急ぎ其使節を遣はさんとて即時に七里奉河守
と横田主膳の兩人へ稟し度され口演微細稟し聞せて江州小谷と越前
一乘谷へ道急がせて立しめ給ふ却説這時織田信長は西成郡中島の

本陣に御座て浮上江堤の味方の敗軍野村越中守の戦死を聞敷驚
き怒給ひて奈何して此恨を晴まきと種々に思慮を巡し給ふに吃
と思し出て使者と仕立早騎と馳させ江州ある横山の城と護らせ置と
る木下藤吉郎とぞ召れりる儲再本願寺より使節七里横田の兩個に
ハ頭如上人の仰せを兼つて浅井朝倉の本國に到り上人よりの仰せの趣
きを委細口演して憑しけし浅井下野守久政子息備前守長政ハ一議
もろく早速領兼し猶朝倉と牒し合せて上洛すまき旨返答ある然るに
義景ハ武に疎き人ゆ兎角の評議に浮漂わねが老臣們諫めて勧めける
ハ天晴究竟の時節と謂へ前には三好黨の軍強く向ひ未だ勝劣決せぬ
処へ石山の依頼へ渡り小船へ當家浅井と稟し合し後と塞きて是と討ハ

信長如何猛しと云とも前後の敵に把込られぬ大軍より共進途に迷は
ん其時石山の門徒へ示して齊く横鎗を入しめん六十に九つ信長を討取
べ早々浅井と牒し合せ御出馬有て然るべしと只管に勧め激しけり義
景實もと兼引ありて江北浅井家へ使者と立軍立評定に速びたる石
山より江北の門徒へも加勢の指揮と通達せしむ浅井備前守長政大
に飲ひ俄に軍勢を催促して四千余騎を引卒し九月下旬小谷と出城し
江西滋賀郡坂本に着陣あり朝倉中務大輔景恒も越前一乗谷と打立つ
一日後まで浅井と俱に比叡山八王寺が峯と阪本堅田に陣を取京と石山
の谷子と聞合せたり抑叡山門の衆徒は朝倉家より師檀の好意厚く
信長に久き怨ありけり故に山門衆徒一同に浅井朝倉と馳走るけり

る程に兩家の威勢京地に余響し實に山門の鄭重云ん方か一這風
とせり河に流説まるより信長殊に驚き給ひ是ハ安らざる繚聴もの
哉當國表へ右も左もあも浅井朝倉兩敵の者も王城に烟と上させふ
バ末代迄も征夷府の取遣信長乃耻辱と成り如何もして當國を引
拂ひ上洛して北國勢を追退けん併三好の一黨本願寺の一揆後を附
て容易引せぬト如何して退らざるやと追の信長も退口の難儀心勞は
して居給ふ處へ彼早騎の使者に引添つ木下藤吉郎秀吉表着の由
言上るせむ待詫給ひし大將信長急ぎ對面ありて轉末と語され本
願寺征伐の繚間きて退陣の手段を談し給ふ秀吉謹んで兼り御錠
の通り該退口こそ實に味方の一大事に候へ併某兼り手配仕らん

君の竊に御退陣有せ給へ三好石山兩敵追迫る共某之と微塵に討推
 き君の軍威と糧う候らん唯愚臣心に係り候ふ御舎弟信治君の
 籠り給ふ江州宇佐山の城にこそ候へ朝倉淺井上洛の上先んずて宇
 佐山を攻懸るべし倘該城敵の有と成る御歸國の道と遮らま且東
 國北國の通路と閉ぐべし早々然るべき軍將遣され信治君に力と戮
 て堅固に籠城かまめ給へと云信長介言に隨ひ先に宇佐山乃後
 見とて置れし森三左衛門可成り這程摂津表の進發に信長に隨ひ
 参向せしと三千餘騎の選兵と屬添宇佐山へ歸らしめ給ふ秀吉ハ御
 前と退き豫め退口の手配りと做し諸將に面談して謀略と稟し合
 せ退陣の準備とらふと

新將軍義隆ハ九月十九日の比信長より勸め奉りて浦江乃
 古城より還御と仰し附従の諸侯御供奉し京都へ歸り奉る

偕又本願寺は北國へ使せし七里参河守横田主膳立飯御門主主従
 へ稟しけつハ淺井朝倉當山に同心し早江州坂本まで出張しマ事
 決戦の手當頼へと告し人々と始め上下の將率大まに勇と歎ひつ兩
 家一躰して上洛かかむ信長の退去程有るを問者と使ひて動
 静と聽とて物馴らる謀者と出して中嶋の本陣窺はせつるに愈九月廿
 七日陣拂ひし諸軍残らひ入京の陣中混雜大方あつと云石
 山の諸將僉勇と立て然る大軍と發し追討して法敵の根断し做兵
 人と踊り上て歎ひ勇が軍師重幸是と制して曰く一座の評議大まに
 違へり既に聖人も之と試みて曰く已と知る者ハ能人と知る討と逸る者
 ハ討ると思へ自利とまる絆ハ必も破る人の好惡皆同一とぞ然る這程

よりの戦争に味方数回の勝利を得たるは是曾て眞の勝利を得るに非
原來信長俺們が徒と農民一揆と看謾り怒りに乗ドて計略と構む唯
一息に攻崩さんとして其機を量つて奇計を行ひ虚を以て實を討つ故に
信長案外の敗をとり今般の退口へ夫と異なり前に三好當山の強敵と
受け後に淺井朝倉の大軍迫れり群狼の死地と脱走謀つて國へ引取
んとす信長の膽量九尋の將の速ふ処に非む備るくして退くまや各
位信長と如何着給ふぞや父信秀世に在り一時迄は足利家の陪臣に在
ども渠世と繼て幾程もかく今川齋藤と打滅亡佐佐木に迫り三好道
下し淺井朝倉の地と縮り將軍家再興の名を楯と終ひて天下と併吞
せんとして蛇蝎山獸と吞平ぶの氣象之と扶る勇臣は柴田佐久間前

田滝川佐々木下池田明智と始め勇烈剛名の臣下數十員従ふ兵卒軍
事に熟し故に實を以て敵對かまへ譬へ味方の十人をして敵の一個に當
るとも勝を把緯難くすまは輕卒に追撃を懸て敵の罨に掛られ給ふか
と詞を盡して止むる処へ野田福島の三好より石山へ使者を以て稟
しけるは北越朝倉江北淺井織田の後を襲んとする江州阪本まで出軍
せしめ依て信長當地に惚り得む廿七日曉天總軍を引拂ひ歸國
致も趣き承り候ふ三好家は於て大軍を發し江口の渡を距て後を屬山
寺邊まで追討と懸信長を討果せんとの心組之故に本願寺の御軍勢ハ
牧方八幡の方へ伏兵を向られ力を戮して責討時の假令信長鬼神にも
あま得こそ討漏す緯候ふまは該議喋ト合せんが爲に使者を以て稟

勝家が即智
敵の計策
と探素
ふん図



勝家

石山軍記 卷之二十一

一入り 詳に演舌小速び 門徒の諸将又勇と立て軍師信長と
 称讚給ふ 織田の分際に過ると思ふ 今三好勢と合勢ありて北脚
 る 織田勢と追討に何の恐怖あり有べしんや 其機と外し後悔ありとも
 六日の葛蒲十日の菊評一眺めて甲斐こそ無れと早打立べきの形勢か
 れの重幸其制一難きと知て介有の計策を構て出勢あれと其軍配を
 ぞ指揮せられし先栗津主税土橋平治と呼て這兩個へ稟し含めら
 様へ信長退去の道條に国界澱川の兩道に別るべし 尙東街道佐太牧方
 と退去るまきと看止る時ハ汝等八百餘騎を引卒し佐太の森に埋伏か
 して織田の軍勢半過ると看べ中陣へ鳥銃を撃入無二無三に斬崩せ
 一亦富島頼母横田主膳西川勘解由僧徒に六万福寺如意寺と呼出

一重幸這五個へ指揮して曰く 各々の兵卒三千餘と引敵兵の後方より
 慕ひ行栗津土橋の伏兵起り立急に進きて差袂を討へ 次は上原傳
 内今井權七と呼出 介方門の千余人と引具し殿口の間に埋伏して織
 田勢亂きて逃來ると不意に起つて炮箭に打するの長追せざして 拙把
 づして夫々手配言含めけし銘々領る軍勢引卒廿六日の甲夜の程
 一り京街道さして打立ける

○秀吉後殿して三好の追人の勢を炮撃を并 勝家石山の伏兵を欺く
 去程に木下藤吉郎秀吉の味方の手配悉く稟し渡り種々の計略を構
 へ十分一愈せ七日退陣催し奉る先鋒に佐久間右門尉信盛佐々
 内藏助成政池田勝三郎信輝五千余人中陣へ大将信長朝臣七字首題

の大旗と押し立てさせ柴田修理進勝家前田又左衛門利家木下藤吉郎秀吉明智十兵衛光秀丹羽五郎左衛門長秀福富平左衛門正清不破河内氏家ト筈等二万余人之後陣の楨津の住人荒木攝津守村重伊丹兵庫頭親興池田筑後守勝政一万二千余人都合其勢三万七千餘人之這外諸国の軍兵三万余りの時昔廿六日悉く暇給ひ居城々々へ引把せたり是の道中の兵糧と厭ひ秀吉が計ひみて勢と減どより先て総軍隊伍と整へ前駈後從と列續し連々に中島と立出らる該時信長は秀吉と俱に逞兵八百人許り引隨へ廿六日夜の八刻竊に先へ出立し給ひ中津川に船橋と架させ打渡りて引退給ひ総軍は大将御座まる体にてあり七字の大旗川風に翻し守口より押出しぬ借も野田福島之城に

籠れる三好日向守長縁細川六郎氏元岩成主梶介慶之等五千余人今日そ信長と討取んとて馬と飛して追懸來るに中島本陣み駈着見れば早くも織田勢退く跡にて苜松明の燃残り而已散這総陣は敵一個も居ざりけり意滑りより程へ行まじ疾逐懸て討込ると川端傳は慕ひ來れは茲に長柄の流まの口に船橋緘て架渡し有る三好勢何の思慮にも違ひぞ涉れや涉れと云も敢て彼船橋と押合込會我先はと乗入々々船橋拒む計りに乗込より時に前向の堤の杜の裡より赤草の具足に躬を固め一騎の武者頭れいで大音聲に呼りけりやと三好の弱兵們俺言處と能聞らじ當時吾朝に大功の名譽と取木下藤吉郎秀吉とい我絆之汝們某の畏に相羅り遙々登つて命と贈ら何より以て満足

に思ふ依て焼有して二献振舞む思ふ儘に吞喰へると言葉の早ると
 合辨とて天地も崩る許りの響きして彼船橋と石火炮にて撃推け
 橋も人馬も微塵と成て浮つ沈つ流れつる恐る人も愚くけり這
 時件の森の裡より飄箆の馬印高く差上木下の郎等浅野蜂須賀堀
 尾等と始めとて五百人の軍兵秀吉と守護一徐々と江口の方へ退き
 一勇々うらけり形勢あり三好が後軍是と看るる處と咬つて
 怒りたれ共さしもれ大河渡るべき手段もあく総軍川岸に立列り唯打
 膽やう忙然とる偕亦這時本道條に織田の軍勢隊と亂さる安堵
 返つて引取ると石山勢は三千余人後と慕つて蜀來織田の後殿荒木
 池田伊丹の守口の邊あて把て返り頗る手ひどく戦つる中にも荒木

揚津守村重の大剛勇の二将あり四尺の大大刀振電して寄来る敵兵
 選もあく七八騎手の下に斬て落し勢ひ盛ん小難廻まら石山勢散々
 に斬捲られて土居村の方へ逃退けば三将共に軍に馴とれハ逃る敵兵
 逐棄あし漸佐太の森まで来る処へ先の敗兵等把て返り猶後崩しに
 打入々三隊の兵入交りて防戦を時に鈴木重幸が指揮に依て茲に
 埋伏せし門徒の軍兵粟津主税土橋平治の佐太の森に待設けし
 時分ハ吉と八百余人関を作つて起り出つ織田勢の中陣と目ざし鳥銃
 二百挺計り筒先揃へて哄と一同に撃懸にたり織田の総軍大まに驚き
 唯一支へも支へずして南北堤傳ひひ逃出せ石山勢は得たり利りと鎗
 先揃へて突へ入り一個も餘すかと色々罵り無二無三に進と追立に牧

方も過て追行し然るに禁野河内國と云る所に到きいふち言の鳥
銃響り一鷹家山中宮の間より柴田勝家明智光秀前田利家の三雄
一万余騎の大軍を卒一関の邑天地を震えし石山勢を八方より取圍
道さぬとて巻寄し石山勢の肝を冷して一方斬破つて退けよとて一
手に聚つて突立れとも勿々目に余る織田の大軍場殺功者の将卒分
れ此処に把込め彼処に追寄突伏せ難倒し當る任せに刃の欠る逆と
斬捲れば門徒の軍兵大半討ぎ虎穴と遁て命多く山手と臨んで逆
るも多し柴田勝家味方指揮して敗る敵を追も止らぬ諸軍を集
めて隊伍と立させ生虜の敵兵殺多有り目通り呼出し嚴く威し
自ら刀を抜て立上り一個の首を斬て落せば余余の生虜大きに恐怖

面色変つて土の如く僉同音に南無阿弥陀佛くと六字の名号唱へ
々々流石に信心獲得の門徒と他目にも殊勝はぞ聞へり勝家大
の眼と舌と怒らし片門徒の蠢虫們掩言を慥に承り這行向の
道條は猶本願寺の伏勢有るし汝們審に首状あるは怒し難き玉
緒なれども助けて此儘歸し得させん倘言まると拒諱は於ては残ら
む寸段々に斬殺し自是直に石山へ把て返し一宗の法脉頭如坊主を
捕へ細首宙に打落し呉二固に二固の返答せしと罵懲を色へ雷の
如く雜兵們の生くる心地を委細稟し外ると打詫つ上原傳内令井
權七千八百騎を引随て澱一口小埋伏せし這余曾て伏兵これ未
來地獄に墮落する共毛頭偽りのありと首状を勝家大きに打笑ひ

て士卒に命じて生虜門の着用する甲冑を脱しめ味方の裡にて
能物馴たる兵士に之を着替させ名号書する合印をも取持せて謀略を
授け石山方の雑卒に打拾即時に澱一口へと遣しける斯ることを知由
も無く上原傳内今井權七兩個の千余騎の兵士を卒に澱一口に埋伏
あて織田の敗軍を喰留めて佛敵信長と討取んとす序唾を吞て俟たる
処へ柴田が仕立し偽の雑兵七八個息喘ぎく馳來りて俺輩の軍師重
幸使に候ふ則ち兩將へ稟され候は信長此街道は向ふては軍勢許
りと豈ららぬ自分小勢を引隨へ西道兵庫街道へ懸り富田茨木と
過ぎ山崎より向明神宮前を徑て入京る由馳与聞き依之追人の面
々の上島と渡り櫻井水無瀬の邊にて専ら對戰の形勢に候ふ各位方

にも早々橋と打距へ山寄に埋伏して前後と圍みて戦ふと軍使
と馳ての報知に候ふと誠しやうに言せられ上原今井の兩個は寂小卒
們と眺め看るに袖印證に六字の名号付て石山よりの使に相違るる
れは兩個偽とら夢も知れ然らば茲に在りとも何の益あり山寄にて信
長と現れんとす一軍卒て道と急ぎ狐の跡と打距行に立地関の邑四方
に發りて男山の邊に雲霞の如く織田の軍兵湊き出て道さりと八方
と取囲め門徒勢の大まに駭き南無三寶敵の計略に陥るとぞ別や退
けやと呼する程に隊伍乱して人浪と打右往左往に逃出せし鳩の峯の
絶頂よりして大木大石と轉ばし緯霰の如く是る鳥に石山勢敵百人首
と碎りし躬と墾りと打累りて死者者立とあせり柴田前田の軍扇を開

き時分へ茲ぞ懸もくと味方と招きて指揮せしむ織田の大軍朝の如
 く寄奉つて斬伏難伏瓜烈く如くに斬て廻れが専ま敗走の石山勢弱
 脱遁人と信傳て漲る瀬川の流れみ追落され溺れ死む者救と知も上
 原今井の兩将も今は是までとも思ひけん多勢の敵中へ喚き入太刀の
 目釘の折る許り死物狂ひふ打戦ひしが其躬金鉄の堅きにあはれ後兩
 個共に救う所の瘡を負竟ふ乱軍の中に陣死してさう織田方十分の勝利
 と得て総軍孤川とび打渡りて山崎の郷に着到すれば信長にも先達て着
 陣在り主従互ひに勝軍と歡び這処にて前後の備を正し江州阪本さ
 て趣き給ふ然る柴田勝家が智略を以て門徒の伏兵を欺きしめ却て信
 長の利軍と成ぬ

繪本石山軍記二編卷之貳終

